

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十五年十月一日発行(毎月一回一日発行)
第十卷第六号(通巻第一一四号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第114号

10. 2003

PDF制作

俳誌のsalon

ひよんの笛

品川 鈴子

校正の置き土産なるひよんの笛

草紅葉走る児鳩に追ひつけず

天守までピストルの音運動会

餌を啜へ炎天鴉鳴かずなる



ソーセージ屋台因幡の蒲は穂に

水引草一揆の手打ちありし丘

八雲居を出て長物の時雨傘

八雲佇みし墓辺のひよろり茸

駅ビルを八雲好むや雷激し

白髪を因幡芒と艶くらべ



玉 鈴

香川 瀬口ゆみ子

墨の香が少し残りし梅雨畳
子供へと返りたがりぬソーダ水
添寝して団扇と共に眠りたり
跣の子泣きに行くのは母の膝
幾重にも水輪描きてさみだるる

愛媛 武司 琴子

夾竹桃天井低き閻魔堂
石橋を叩いて雨の蝸牛
手火花を囲める子等の膝頭
雲の峰島の石切り真っ盛り
シンクロナイズドめく子子の浮き沈み

大阪 竹下 昭子

赤ワインの如く真紅に紫蘇ジュース
不可解なニュースの多し蟬の殻
声高な医師の診断夏の風邪
待合の夏風邪男所在なげ
夏風邪の葉受け取る武骨者

吟

和歌山 田中嘉代子

御廐の神馬の腹帯梅雨湿り
棟上げし家を吹き抜く青田風
紫蘇揉みし手にて仏飯供へたり
一瞬の花火焼き付く天の画布
茄子挽ぎし指紫の棘ささる

大阪 谷 泰子

鷺の難逃れし鮎に築の難
鮎の背の黒く光れり築誇り
攪網たもずらり並べ干したる築番屋
築日誌今日是不漁とのみ書かれ
安曇川の三角洲デルタに住みて築を守る

愛媛 筒井圭子朗

水番に専念不況の工場辞し
捕虫網持たぬ幼弟蹤き廻る
フル稼働する山小屋の乾燥機
給食車入る青田の鉄工所
大夕立砂場の砂を叩き出す

兵庫 内藤 三男

Tシャツに解らぬ英語梅雨明ける
明け易やツインルームに一人寝ね
黴の書に花袋の「蒲団」混じりをり
苗箱を片付け婚の荷を下ろす
漉れし葉の笹に希ひや星祭

大阪 中島 霞

屋上の縁へりをあるける梅雨鴉
濃淡の紅蓮ぐるりと帝陵みかど
風鈴にみどりごの四肢よく動く
明易やこまぎれの夢とどめ得ず
辞書繰るも涼し談笑はづみゐて

大阪 中田 征二

研する分水嶺の滝の音
天城越ゆ一高生の素足かな
梅雨の闇墨絵暈しの天城越ゆ
天城越ゆバスに紛れし夏の蝶
絵手紙で浴衣まつりの誘ひ文

大阪 中田 寿子

梧桐や少年青き肌持ちて
京町家三間突き抜けし夏座敷
羅や花見小路へ曲りをり
回転の扉ゆるりと大暑来る
日焼の児マシユマロめきしパンツ跡

愛媛 永野 秀峰

鮎の宿女将は美人客が来る
塩盛りて打水をして客迎ふ
装飾用四角い西瓜輸出する
落人の村今も揚げざる鯉幟
湧き出づる大師の水に心太

高知 西村 椿子

梅雨寒しアルペルート乗り継ぎて
黒部ダム大放水に飛ぶ燕
目眩めくダム放水の虹に佇つ
本もの、蝮に出逢ひ北叟笑む
土佐育ちなじめぬ陸奥の海鞘料理

薬草歳時記

(一一三) ナナカマド (七竈)

八木 紀子

初雪を被り朝日に煙めく真つ赤な実、北海道のナナカマドです。7回竈に入れてもまだ燃え残るという所からこの名がついたと言われる。材質は堅く7日間、炭竈すみかまに入れて炭を焼く7日竈が実情で極上の堅炭かたかみが出来ます。

ナナカマドは日本固有種で北海道から南千島の山地帯や亜高山帯に分布し樹高6〜15mの落葉高木です。高山帯にはタカネ・ウラジオ(丈1〜2m)・ザビバ・ミヤマ・エゾなどの変種やノリクラなどの名が冠されるナナカマドの雑種が多い。ちなみに標高とは山地帯で約500〜1500m、亜高山(1500〜2500m)・高山(2500m以上)。生育には気温が強く影響する。6月〜7月枝先にびっしり小さな五弁の白花が咲きます。9から10月葉がまだ緑の内から房成りの小さな実が色付き花の少ないこの時期、ナナカマドの赤い実は旅人の心を和ませる。そして晩秋見事な葉の紅葉で北地の秋を美しく彩り並木や生花に使われる。落葉後も赤い実は残り

やがて雪の寒さを受け実は完熟しその毒性が消失。するとレンジャクなど小鳥が次々と実を啄みます。日本に渡来する冬鳥速雀レンジャクが特に厳しい冬に多量死した。鳥の胃袋には未熟な七竈の実があったと新聞を賑わしたそうです。樹皮にタンニン、果実にソルビトールを含み樹皮を日干し煎服。果実は薬酒にし下痢、膀胱の病気に民間薬として用いられますがその薬理作用と効果の詳細は不明だそうです。他に樹皮は染料、材は細工物原料に使用。2002年8月のドイツは連日30度の異常気象で真つ青な空と緑一色の中でハマナシと七竈の赤い実が目を引いた。旅慣れない目には遠く離れた異国の文化と土地で日本で見掛ける同じ植物に出合い当然事なのに「まさか!」と一瞬不思議な錯覚を覚えた。大柄なゲルマン民族に出合う度に「デッカイなく」と見上げる主人と私。ふとあちら様は「チッコイなく」と見ているだろなど急に吹き出した。ナナカマドの赤い実が更に眩しい夏でした。

参考文献

「花おりおり」

朝日新聞社

「季寄せ草木花」

朝日新聞社

「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

著者略歴

神戸薬科大学卒

ナナカマド〔ナナカマド属〕(ばら科) *Sorbus commixta* Hedl.

(七竈)

(*S. aucuparia* L. var. *japonica* Maxim)



吹き抜きのロビーに余るななかまど	七竈散るをこらへて真つ赤なり	湿原に神の焚く火かななかまど	ななかまど尾根に吹く雲霧となり	ななかまどわが家の方へ山幾重	雲岳が並びをり実のななかまど	噴煙の空迫り来つななかまど	ななかまど赤し山人やすを手に
竹下	林	堀口	原	相馬	和知	水原	田村
昭子	徹	星眠	柯城	遷子	喜八	秋桜子	木国

くろつけ

鈴の奏

品川鈴子選

透き通る忍野の水の冷奴 愛知 市川十二代

胎動をさするてのひら合歡の花

如意棒のやうな胡瓜をもぎにけり

緞帳のするする上がる涼しさよ

梅雨晴れの開け放たれし仏具店 兵庫 中川美代子

青田風大きく曲がり露風の碑

蝸牛ダリに見せたき程の縞

朝食の白粥ふきて夏燕

法服の衣替えしてやはり黒 大阪 河村 武信

炎昼の一言重し判決文

汗ばみて交わす問答刺す視線

翡翠に気をとられてや浮き逃がし

繰り返すバイエル聞いている端居 兵庫 津田 霧笛

父の日は良き父たらむさればとて

端居して留守居頼まれ生返事

刃物研ぎ梅雨の軒端に中休み

花水老も若きも手をあてる 兵庫 伊藤 光子

手のあたるとこのみ窪む花水

賜はりし匂ひ袋に梅雨忘る

梅雨寒の猫より来たる膝の上

炎天に練習船の出航す 東京 八代 嫻

山葵咲く雲の信濃に逢ひにけり

日輪へ胡瓜はぐいと曲がるなり

茅舎の忌石に魂ありにけり

愛着も捨つべし紺の衣魚背広 兵庫 山口 博通

一世紀経し蔵の主青大将

十葉の花夕暮るる医家の庭

奇書珍書座敷狭しと曝したり

ふたりっ子母もきりりと祭髪 埼玉 中村 和江

捨て種のかぼちゃは竜に化身せり

お囃子につられて遠き本屋まで

公民館昼より暗き蛭会

殺生戒毛虫に及ぶ及ばざる 兵庫 栗田 武三

毛虫てふ小さき刺客を侮らず

温顔に毛虫遊ばせ地蔵尊

古葉だけ残し毛虫の失せにけり

三尺寝札所めぐりの運転手

羅を着し緊張のそこはかと

蓮の寺六文銭の守り買ふ

くりかへすダンスに老の汗絞り

葉畳の下蛸蚪の国神の池

波音をたたみ堤防大緑蔭

少年の挨拶涼し耐久舎

耐久舎四十三畳梅雨じめる

梅雨の雷そこのけ急げ救急車

幾日も泊り客無き梅雨の宿

留守番の夫にご褒美冷し酒

遙かなる天の岩戸は深緑

木道に沿ひしワタスゲそつと撫で

来月はお稽古休み西瓜食ぶ

木道の左右の蓮は背丈程

車中の幼子絵本で遊ぶ梅雨激し

見送りはエレベーター前夏休み

夕立の真只中のユニフォーム

品書きも夏スリッパも用意出来

愛媛 城下 明美

大阪 木野 裕美

愛媛 南 英子

愛媛 安部美和子

兵庫 池田 久恵

花終り翁の髭の鉄線や

遍路みちうまく交して対向車

半夏生色よき陶に茶釜ふる

夏霧に濡れ巡礼の列の中

星生まる合歓眠らせし暗き谿

静かなる大地揺さぶる揚花花

歓声は花火の揚がる毎に湧く

青草を枕に仰ぐ揚花花

花火客丘への道に列をなす

楊梅の落ちてまたもや墓穢す

蜘蛛の囿に捕へられたる雨の粒

脚開きつくしあめんぼ遡る

待つことが生き方なりや蟻地獄

七月の夜明音なく妻逝けり

妻の忌や京の寺まで墓参り

羅を着て唱ふるや永代経

法要の読経の部屋は梅雨じめり

電線に小燕七羽親を待つ

宛名書き筆滞る炎暑かな

暑き日の直江津海岸安寿の碑

葉桜の湯の街人の影もなし

神戸 宮武美代子

トロント 恩塚 典子

埼玉 岡田 章子

小田 知人

松木 清川

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句〜十五句 勝野 薫 //

* 選句は全て 品川鈴子

透き通る忍野の水の冷奴

市川十二代

忍野おしのと言う地名に、一種の郷愁を覚えるのは、他ならぬ

山口誓子が最後の吟行をした処ゆえ。富士の雪解水が伏流する辺の五句を「ぐるっけ」創刊号の巻頭に寄せられたへ解けし雪富士山潜り八海に 誓子その清らかな冷たい水は冷奴の味を引きたてるに最適。

蝸牛ダリに見せたき程の縞

中川美代子

蝸牛の縞模様がくつきり個性的なのを、もしもダリに見せたら、彼独特のデフォルメをするだろう。とろけて垂れ下がる歪など鮮やかな美を創るに違いない。虚に遊ぶ楽しさ。空想の豊かさ。

法服の衣替えしてやはり黒

河村 武信

裁判官などが法廷で着る制服、法服は夏用に替わっても黒から黒への変化で、殆ど代わり映えがしない。色めくと

ころでは無い聖域にやはりふさわしいのが黒。それは仏教とも同源の墨染めの暗くろ、溼ぬりで法衣ほうえの律にも通じるのだろうか。

繰り返すバイエル聞いている端居

津田 霧笛

作曲家バイエルが初步のピアノ教則本として作った曲が聞こえてくる。時々指がとまったり音を外したり、しかし熱心に弾いている。聞きながらもその昔習っていた頃を思い出したりする。練習しているのは多分幼い女の子だろう。満ち足りた静かな時間が流れる。余裕のある暮らしぶりがさりげなく伝わってくる。

手のあたるとこのみ窪む花水

伊藤 光子

花水は見えた目も爽やかで装飾と冷房を兼ねる。クーラーの普及で近頃はあまり見かけない。私の記憶ではデパートだが氷の中の花はたぶん紺の桔梗だったと思う。花水は冷房効果よりも売場のディスプレイとして置く場合が多い。一人が触ると次々と触るのでそこがよく溶ける。稀に鯛とかの魚を入れた氷柱も有る。(以下略)